

FORUM

Vol.17

大阪府立大学
高等教育開発センターニュース

「フォーラム」

第17号

CONTENTS

巻頭言 2

公立大学法人大阪府立大学理事(高専担当)
大阪府立大学工業高等専門学校長 長澤 啓行

コラム 3

「SD 学びの姿勢」

大阪府立大学高等教育推進機構教育推進課長 柳 嘉夫

＊読者の声＊

FDセミナー(報告) 4

—学生と変える大学の教育—

FDワークショップ(報告) 5

「初年次ゼミの始まりを前に
—書き上げたシラバスからもう一度考える」

「ゼミナール学びの転換」を 8

受講した学生の声

高等教育開発センター 10

2011年度活動報告

編集後記 12



大阪府立大学
OSAKA PREFECTURE UNIVERSITY

巻頭言

● 公立大学法人大阪府立大学理事(高専担当)
大阪府立大学工業高等専門学校校長

長澤啓行

HIROYUKI NAGASAWA



長澤 啓行

HIROYUKI NAGASAWA

公立大学法人大阪府立大学理事(高専担当)
大阪府立大学工業高等専門学校長

1977年大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了、1985年京都大学工学博士。
本学工学部助手、講師、助教授を経て、1995年4月に教授。2001年8月から2005年3月末まで評議員として本学法人化・工学部再編に尽力。2009年4月に大阪府立工業高等専門学校長に就任し高専法人化・再編を準備。2011年4月に公立大学法人大阪府立大学理事、大阪府立大学工業高等専門学校長(校名変更)に就任し、現在に至る。

高等教育改革とティーチングポートフォリオの役割

「高等教育における質の保証」が叫ばれて久しい。私もかつては本学教授としてFD活動に奔走し、何度も挫折を味わいました。だからというわけではありませんが、57才で教授生活を打ち切り、2009年4月に府立高専校長に就任しました。府大法人化の経験を活かして、高専法人化を準備するためです。

高専では教員の教育にける熱意の高さと学生のものづくりへの執着心の強さに驚かされました。高専には5年制の本科の上に2年制の専攻科ができており、本科4・5年と専攻科を合わせると大学の学士課程に相当します。そのため、大学と同様、7年に一度の認証評価を受けなくてはなりません。府立高専は2007年に日本技術者認定機構JABEEの認定を受けましたが、W(弱点)が5項目、C(懸念)が13項目ついていました。これを打開すべく、ひとりの高専教員が大学評価・学位授与機構主催のティーチングポートフォリオ(TP)ワークショップに参加し、TPを作成したのです。その2ヶ月後に別の教員がTPを包括したアカデミックポートフォリオを書き上げています。彼ら二人が中心になり、2009年1月に全国高専初のTPワークショップを府立高専で開き、教員6名が新たにTPを作成するに至ったのです。

私が校長へ赴任したのはその直後でした。最初にTPの説明を受けたとき、「これだ!」と思ったものです。TPは教員個人の教育理念・戦略・方法・評価・改善・今後の目標などを短くまとめ、エビデンスで裏付けするというもので、FD活動の

根本を構築することができます。私は早速、2回目のワークショップで自らTPを作成、高専ホームページで公開し、「府立高専をTPのメッカに!」「全教員がTP作成を!」とぶち上げました。TPは教員個人の想いを自由意思で記述するもので、強制はできません。とても無謀な目標だと思われるかもしれませんが、高専教員なら期待に応えてくれると信じています。なぜなら、高専教員は卒業研究を含めて時間割で週15~20時間拘束され、学生の実践教育と課外活動・学生指導に多大な時間をかけ、教育・研究が7:3で教育中心の生活を送っているからです。

高専教員の地道な努力により、2012年3月末現在、教員78名中40名、51%(全国一)がTPを書いてくれました。2009年のJABEE中間審査ではWとCがすべてA(適合)に替わり、2010年には大学教育GPに採択され、大学評価・学位授与機構による認証評価でも高く評価されました。2011年末にはTPの本も出版しています。

しかし、これはほんの一里塚。大学教育GPで計画していたのは教員のTPと学生のラーニングポートフォリオを組み合わせてFDを進めることでした。残念ながら2012年度は国の予算が打ち切られましたが、高専内での取り組みは進めるつもりです。

実践的技術者教育を進める高専での高等教育改革の取り組みが、府大でのFDにそのまま活かせるとは思いませんが、何らかの参考になるのではないかと思います。「学生を育てる高等教育機関」という点で、ルーツは同じですから。

SD 学びの 姿勢

昨年4月から、社会人管理職採用の一期生として教育推進課長を拝命し勤務しています。大学卒業以来一貫して金融関係に身をおいて来たものにとって、大学に着任した当初は一種の異次元空間に迷い込んでしまったような感を覚えました。FDと言えばフロッピーディスク、IRと聞けばインベスターリレーションを思い浮かべる習慣も、転職して早一年近くが過ぎ徐々に変化しております。

事業(再生)投資や不動産投資、地方金融機関との地域再生ファンドの運営などを行っていた前社での経験を活かすべく大学へやって来たものの、意思決定プロセスの複雑さや時間軸の違いに大いに驚かされる日々でした。しかしながら、不真面目に過ごした学生時代には想像もつかなかった、教員の皆さんの教育・研究にける熱い思いを知ったことは、驚きであるとともに大きな喜びでもありました。

教育・研究の現場での職員の在り方には、皆さんがいろいろな考えをお持ちだと思います。私自身は、就任挨拶のなかで「大学においては教員がフロントで職員はバックオフィスであると言われていたようだが、ミドルオフィスを目指すべきである。」と偉そうなことを申し上げました。職員の本分は教員

を支えていくことが中心であるというのは、一面では正しいようでもあります。その反面、責任感の欠如という弊害がついてまわり、あくまで受動的な職務遂行に終始し能動的に何をやるべきかを考えない職員がいるとすれば、大きな問題だと言わざるを得ないと思っております。教学マネジメントにおいて、一貫性・体系性を持ったプログラムを提供するためには、教学部門は言うに及ばず、法人部局においても高度な専門性を具備した職員が積極的に関与していくことが重要であると考えております。

自らが考え、相反事象を理解してより良い結論を導いていく。そのためには、不断の自己研鑽と先取の気概を常に持ち続けることが重要であると考えています。容易なことではありませんが、本学の法人職員は基本的に学ぶことが嫌いではなく、むしろ大学に働く場を求めたことから、学びの姿勢は他の企業に就職した人達よりも積極的であるはずだと思っております。その学びの姿勢をより高めていくことがマネジメントを担う職員にとっての大きな課題であることを敢えて提言し、SDの重要性を敷衍していくことが私の大きなミッションの一つであると考えています。SDとはメモリーカードのことを言っているわけではありませんので念のため。



柳 嘉夫 YOSHIO YANAGI

教育推進課長

1957年生まれ 大阪府立大学経済学部卒業 東京金融先物取引所 調査G調査役、近畿銀行平野支店長、(株)リサ・パートナーズ 取締役営業第1部長、執行役員経営戦略部長、執行役員財務部長などを経て、2011年4月より大阪府立大学高等教育推進機構教育推進課長

読者の声

学内のコミュニケーションの充実をはかるため、今後の活動に反映させるため、「読者の声」を掲載しています。本誌を読まれてのご意見・ご希望・身近な話題など、皆さまの声を紹介させていただく場とします。ふるってご投稿くださいますよう、お待ちしております。

小島 良貴 (21世紀科学研究機構 EV開発研究センター事務局)

FORUM第15号の巻頭言で安保正一理事のコミュニケーション能力の大切さについてのお説を読み、私はロシアの教育学者・クルプスカヤの「人間は本が読めるだけであってはならない」という有名な言葉を思い出しました。学問をより深めるにも、社会に出て活躍するにも、個人としての幸福を追求するにも、結局はコミュニケーション能力が基底的に必要である、と言えるでしょう。しかしながら高度な技術に囲まれ、支えられている私たちの生活や社会は時折それを忘れていたような気がします。高等教育機関に勤める者として、コミュニケーション能力を大切にしつつ組織の発展に寄与したいという思いを強めました。

高等教育開発センターWebの刊行誌ページに、投稿窓口を掲載しています。ぜひお寄せ下さい。

問題 2009年度に一年生調査に回答していただいた学生を対象に、今年度、上級生調査を同じ調査項目で実施しました。その中で、「あなたの学生生活は充実していますか」の回答を一年生調査と比較した結果、「充実している」に回答した割合は、どう推移したでしょう？

①大きく増加した ②ごくわずかに増加した ③ごくわずかに減少した ④大きく減少した

「読者の声」の投稿と問題の解答は → <http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/publication/index.html>

REPORT
平成23年度
第2回
FDセミナー
報告

「学生と変える大学の教育」

講師 木野 茂 氏（立命館大学共通教育推進機構教授）

12月15日(木)

中百舌鳥キャンパスB3棟-117講義室

（羽曳野キャンパスB-201、りんくうキャンパス会議室 遠隔中継）

「学生FD」という単語が最近FD関連のシンポジウム等では1つのキーワードとなっている。FDはFaculty（教員集団）が対象なので、学生FDというときには、学生と共にFDを進めるということであろうが、「教員が何を教えるか」から「学生が何をできるようになるか」を問われる時代になり、学生をFDにどう位置づけるかは重要な論点であるのは間違いない。こういった背景のもと、今回は、学生FDを全国的に広めてこられた立命館大学の木野茂先生をお招きし、学生にも参加してもらう形で、学生FDの意義を理解し、必要なら府大でも組織化する契機とすることを目指して、セミナーを開催した。



講演は、学生FDを始めた動機（学生参加型授業を作ったこと、学生を参加させることで教員・職員と三位一体のFDとなり、教職員の意識も変わることなど）と立命館大学での学生FD組織の立ち上げ・運営、そして、その活動が全国学生FDサミットという形で全国の大学に拡がり、多くの大学で学生FDが広がっているだけでなく、大学間の交流も進んでいる、という内容であった。

学生FDとは、学生の視点から授業・教育・大学を良くしようとする学生が主体となった取り組みの総称であり、学生だけで行うのではなく、目的を同じくする教職員との三位一体で進めることである。当然であるが、大学のサポートは必要であり、さらに言えば、サポートに徹する必要がある。また、学生FDの意義は、教職員だけのFDでは学生がどう思っているかどう受け止めているかを汲み取れていない、見えていないところがあるため、実際に学生に聞き、学生の視点を取り入れることで大学のFDはバランスよく発展すること、もう一つはその活動によって学生自身も成長することであるとのは、良く理解できた。問題は、大阪府



立大学で学生がこのような活動を求めているか、教職員がその意義を理解してサポートできるかであろう。個人的には、何とかこのような活動を府大にも立ち上げて、FDを推進する契機としたいと考えている。学生の学びを中心に考えるのなら、学生の視点がFDにも必須ではないだろうか。

（高橋）

平成23年度

FDワークショップ報告

「初年次ゼミの始まりを前に —書き上げたシラバスからもう一度考える」

1月24日(火) 14時30分～17時30分

平成 24 年度前期からいよいよ初年次ゼミが始まります。

このゼミは、大学に入学して一番早く最も身近に接する、しかも自分の興味関心から主体的に選ぶもので、新入生にとってその後の大学生活を決定づける重要性を持ちます。

というのも、1 年時の成績がその後の成績を決定付ける傾向があることは本学でもつとに指摘されていますし、また、いわゆる「フンボルトの谷間」に落ちかけた私自身の経験からも言えるところです。まさに、初年次ゼミは、初年次学習の中核をなし、「知のインシエーション」となるものです。

対峙する教員側にも相当の準備と覚悟が求められます。担当教員は、姿の見えない、ブレデターのような学生を想定して、シラバスを書き上げなければならない、相当に悩まれ苦労されたことでしょう。

今回のワークショップは、こうした悩みを共感・共有し、情報を交換し、教員と学生がともに満足できる初年次ゼミを達成できるように、PDCA サイクルの Check(入念な評価)を行うことで、Action(改善)に結び付け、新たな PDCA サイクルへとスパイラル・アップしていく一工程として開催されました。

具体的には、昨年パイロット授業を担当された教員をファシリテータとして、来年度の担当者 4～5 名のグループに分かれ、授業計画が初年次ゼミの授業目標に合致した形で組織化されているか、目標を達成するための学習スキルが組み込まれているかを自己評価した上で、全体で共有すべき(普遍化すべき)要素を抽出し、各グループの報告を受け、Q & A 形式で議論を深めていきました。

ここでは、お互いの悩みが共通していることの共感と、今後も情報交換の場が必要であることの認識が共有されました。合わせて、全体会では、ゼミ生とコミュニケーションしやすい雰囲気醸成、常に「なぜ?」と疑問を発し続けることで問題の本質に迫れる思考型構成の模索、やり直し報告を課すことによる成功体験の獲得等が特に論議と関心を呼びました。

来年度は、このワークショップに参加された教員が新たなファシリテータとなって、失敗を含めその成果を次の担当者に伝えていき、その後もこの繰り返しと積み重ねによって、本学の初年次ゼミを支え根付かせる教育風土になっていくことを強く願う次第です。

(水鳥)

FDワークショップに参加して

..... 小泉 望 (応用生命系)

初年次ゼミナールに関する今回のFDワークショップは、グループに分かれて議論をするという形式で行われました。その後、それぞれのグループの議論の内容を各グループの代表がプレゼンし、参加者が意識の共有を図るという構成になっていました。私が初年次ゼミで取り入れようとしている形式であり、ブレインストーミングに役立ちました。私たちのグループの結論は、初年次ゼミはシラバス通りに行かないことを前提に、臨機応変に対応するしかないというものでした。今回のワークショップでも、グループワークのお題が設定されていましたが、そのお題通りに作業は進みませんでした。しかし、結果的にはグループでの議論を通して、悩みや情報の共有、多様な視点など多くの成果がありました。参加された他の先生方も同様の感想をお持ちになったように感じました。今年度にパイロットゼミを担当されたファシリテーターの先生からの多くのアドバイスも含め、初年次ゼミのイメージを具体化するのに有意義な機会となりました。初年次ゼミが動き出したら改めて、このような機会を設けて頂けたらと思います。



..... 角田 茂 (人文科学系)

「人間はすべて障害者である。最大の障害者は、自分の障害に気づいていない人である」。これは私の持論であり、学生にも言い続けてきたことである。科学・技術の領域においても、自分の実験系やプラントの欠点・限界を理解していなければ、福島原発などの事故が起きる。また経済理論でも同様であり、自分の経済理論の欠点・限界を理解していなければ、資本主義を狂気のごとく暴走させてしまう。我々は自分の障害を常に理解していなければならない。哲学的には、ソクラテスの「無知の知」という謙虚な立場をとることである。

「無知の知」という立場での好奇心、これを養うのが初年度ゼミナールである。この好奇心こそ、学問を推進させる本当の力である。今回のFDワークショップに参加した教員は、みな教育熱心で、「無知の知」という立場をとる謙虚な人々であった。わからないことを、学生も教員も「わからない」とはっきり言える環境を作り、学生と教員がともに探求し、成長する場をこのゼミナールに作ることで意見が一致した。

初年次ゼミナールのパイロット授業を行って

FDワークショップ・ファシリテータの感想

..... 高橋 哲也 (高等教育推進機構長・数学系)

今回、ファシリテータとして参加して改めて痛感したことは、「やってみないと分からない」ということである。思い起こせば、昨年度のパイロット授業開始前、多くの大学の事例を研究し、視察してきても、やはり不安はあった。しかし、その不安は最初の授業で消え去った。今年度の経験をうまくいった部分も改善すべく点もできるだけお話ししたが、やはりそれだけでは安心できないのは当然である。そういった不安の解消のためには、今年度以降、学生にも参加してもらった事例報告を導入するのが効果的ではないだろうか。



..... 新井 隆景 (航空宇宙海洋系)

平成24年度から実施される初年次ゼミナールの開講に向けてパイロット授業として平成23年度前期に「ゼミナール学びの転換」と題して授業を行った。受講生の所属は、工学部の他、経済学部、生命環境学部であった。テーマは「持続可能な宇宙開発」として、科学技術(宇宙開発プロジェクトに限らなかった)の功罪をこれまでの科学技術の歴史と現状から考え、将来(近未来)を議論しようとした。学生諸君の好奇心は旺盛で、その歴史と現状を調べることで、世界各国の文化・歴史、政治哲学、等と科学技術が密接に関係していることを見抜いた。これは、小職にとって驚きとともにうれしい誤算であり、学生から小職が学ぶことも多かった。特に、工学を専門とする小職にとって、工学は地球環境を含む人類にとって幸福をもたらすものでなくてはならないものであることを再認識したことは大きい。

「ゼミナール学びの転換」 を受講した学生の声

ここでは、初年次ゼミナールの導入を前に、平成23年度前期に実施したパイロット授業「ゼミナール学びの転換」を受講した学生からの感想を紹介します。（平成24年度の入学生に配布する「初年次ゼミナールガイド」の“先輩からのメッセージ”を抜粋したものです。）

通常の講義とは大きく違って、ゼミナールの授業はグループでの議論やワークが主となっています。私の出身高校ではそういった活動がほとんど無く、今までは一つのテーマについて互いに意見を交わす機会がありませんでした。皆さんにも同じ様な人がいると思うので、ゼミナールの経験を通して二つのアドバイスを送ります。

一つは自らの意見を持つことです。議論をするにはまず何かしら意見が必要になります。しかし、それを何となく決めたのでは意味がありません。しっかりと考えて吟味した意見を自分の意見として主張することを心掛けて下さい。

もう一つは主体的に行動することです。グループ発表の際に班員同士の連携が取れず、直前まで準備が完了していませんでした。他人任せではなく、自分から連絡を取れば防げたと思います。資料探しやスライド作成等を含めて、グループの為、能動的に動くことが大切です。

これらの点を踏まえてゼミナールに取り組んでみて下さい。

工学部 受講生

「暗号の歴史と効用 一カエサルから携帯電話まで」(担当:高橋哲也)

前期で私は暗号に関する内容の「ゼミナール 学びの転換(c)」を履修しました。履修した理由は、『暗号』というキーワードに興味を持ったということだけでしたし、テーマのためか、女子はたった3人でしたが、とても面白く受講しました。

授業は、講義形式だけでなく、コンピュータを使って実際に暗号の仕組みを理解・体験したり、チームに分かれてのプレゼンテーションや、ディベートと様々な方法で行われました。チームに分かれてのプレゼンテーションやディベートは、互いに学部や学科が違うこともあり難しい面もありましたが、和やかな雰囲気で行なわれ、大変でしたが楽しいものでした。教養科目ですので、自分が普段受けている授業とはまったく毛色の違うものですが、いつもとは違う知識や物の見方を得ることができます。少人数ですので講師の先生やほかの学部の生徒と近い距離で意見を交換することができ、仲良くなるのも最も大きなメリットのひとつだと思います。

このような機会は貴重だと、私は感じました。ゼミナールにもさまざまな形式や目的があると思いますが、この機会をぜひ有意義に利用してほしいと思います。

生命環境科学部 前田 英里香

「暗号の歴史と効用 一カエサルから携帯電話まで」(担当:高橋哲也)

入学当初、この授業を取ろうと思ったきっかけは、大学生でしか経験できないゼミナールというものを早く経験したかったから、という単純な理由でした。

私は一回生のとき、前期後期共にこの前川ゼミをとりました。(授業の進め方や内容は後ほどわかると思います。) 何気なくとった授業でしたが、授業が進むに連れて自分の考えていることをもっと分かりやすく、また、本の内容などをもっと簡潔に人前で発表するという能力を伸ばしたいと考えるようになり、前期の授業で発見できたその課題をより突き詰めたいと思い後期も受講しました。

この授業で扱う書籍は、普段私たちが読んでいるものよりも内容がより具体的で複雑です。その複雑な内容の分からなかった点や疑問を皆で話しあうわけですが、この授業のいいところに、イヤでも議論に参加せざるをえないという点があります。議論に参加できず内容理解が中途半端なまま授業が終わると、自分自身スッキリしない気持ちになりますし、何より授業を楽しめません。分からないところを素直に質問したり、自分の考えを発言し他の人の捉え方や考えを聞いて、納得や反論ができれば、自然と授業に参加しているという意識が生まれ、ゼミナールのメンバー間での一体感のようなものが生まれます。私自身、一年間このゼミナールを受講し、授業の楽しみ方はそこにあると感じました。

こういった授業形式はあまり馴染みがないので、どうすればいいか分からなかったり緊張すると思いますが、このゼミナールを通して“授業を楽しむ”という感覚を味わってもらえたらなと思います。では皆さん、がんばってください!

経済学部 森本 晃生

「現代社会を読む」(担当:前川真行)

新入生の皆さんは「ゼミ」と言われてもピンとこないかもしれません。

僕が昨年度受講したゼミでは、住居問題や都市問題についての本を読み、その内容をグループ毎にそれぞれレジュメ(プリント)にまとめ発表し、その上で出た疑問点や筆者の主張について議論をしました。

このゼミでは司会進行も生徒が行ったので、最初の方は授業の進行が上手くいかないこともありましたが、先生がどのように進めたら良いかというアドバイスを下さるので、それを受けて自分でどのようにしたら良いかということを考えていくことで、次第に進行ができるようになりました。

このように積極的に、自分から授業をどのように進めるかと考える機会は、ゼミを除いては殆どないでしょう。良い授業を作りたいという自分の意思が反映されやすいのが、ゼミの良いところだと思います。

もちろん良い授業を作っていくためには相応の努力は必要ですが、そのやる気がある人にとっては良い環境になるでしょう。

経済学部 佐々木 将貴

「現代社会を読む」(担当:前川真行)

高等教育開発センター

2011年度活動報告

●セミナー・研修会の企画・実施

次年度からの新たなカリキュラムにおいて重要な科目として開講する「初年次ゼミ」を目前に控え、第1回のFDセミナーではパイロット授業を担当された先生方からの事例報告と、ワークショップでは能動的学習に向けて、より実践的な内容で、初年次ゼミ担当の先生方にお集りいただきました。また昨年度に続き、学生の皆さんとのコミュニケーションを図る学生懇話会の開催と、第2回セミナーでは初めて「学生FD」を取り上げ、学生の皆さんにも参加していただきました。

セミナー・研修会	内容	年月日
第1回FDセミナー	テーマ:『初年次ゼミナール』とは何か?ーパイロット授業の経験からー 「初年次ゼミナール概要説明」「ツール紹介」「パイロット授業事例報告」	2011/9/6
第2回FDセミナー	「学生と変える 大学の教育」 (立命館大学共通教育推進機構教授・木野 茂氏)	2011/12/15
新任教員FD研修	新規着任教員対象のFD研修会 「大阪府立大学の教育課程、システムサポート、教務の流れについて」 「授業を育てる」「府大に入学してくる学生について」 「府大を取り巻く教育環境」 「学生のメンタルヘルスケア」	2011/5/27
学生FD懇話会	白熱教室 in 大阪府立大学～高橋副学長に、よりよい学習環境づくりを問う～	2011/11/22
FDワークショップ	テーマ:初年次ゼミの始まりを前に一書きあげたシラバスからもう一度考えるー	2012/1/24

●調査の実施

◎授業アンケートの実施と分析

前期開講科目では、2011年5月30日～6月10日に、学生ポータルを通じてWeb上で「中間アンケート(自由記述のみ)」を実施し、前期後半の授業改善に役立てていただきました。その後7月19日～8月8日に実施した今年度の「期末アンケート」は、学生に自らの学びを自己評価してもらうことで、授業への取り組み姿勢や理解度を教員が把握することを組み込んだ内容に改善し、学生からの授業改善要望を後期・次年度の授業改善へと繋げる趣旨で実施しました(教員が希望する科目はマークシート方式の用紙で実施)。

後期開講科目でも同様に、「中間アンケート」を11月21日から12月2日、「期末アンケート」を1月23日から2月10日に実施しました。また、一部の大学院科目でも授業アンケートを実施しました。

◎大学院教育の実施

このアンケートは、大阪府立大学大学院に在籍する学生の皆さんから、授業や教育一般に対する意見や要望を集め、教育内容・方法の改善を行っていくための基礎資料を得ることを目的とし、2011年6月27日～2012年3月2日まで実施しました。

◎卒業予定者・大学院修士課程修了予定者アンケートの実施

本学における教育改善のための基礎資料を得ることを目的として、2011年度の卒業・修了予定者を対象としたアンケートを実施しました。2008年度にも同様のアンケートを実施し、内容はその時とほぼ同じです。

●印刷物発行

◎センターニュースの発行

センターニュース「FORUM」を3号(第15.16.17号)発行し、学内の全教職員に配布した他、他大学FD関連部署や、大阪府・その他の高等学校にも送付しました。

◎ニュースメールの配信

センターからのお知らせを「ニュースメール」にて全教職員に学内配信しました。

名称	内容	発行月
「フォーラム」第15号	新任教員FD研修参加報告、新・教務学生システムについてなど	2011/9
「フォーラム」第16号	初年次ゼミナール(第1回FDセミナー報告)、学生FD懇話会報告など	2011/12
「フォーラム」第17号	第2回FDセミナー報告、FDワークショップ報告、初年次ゼミナール～後輩へのメッセージ～、高等教育開発センター活動報告など	2012/3
「ニュースメール」配信	授業アンケート他、センターの活動予定・報告、センターWebページの紹介、FD・SD関連研究集会等のお知らせなど	全11回配信

●所員派遣

派遣先	派遣内容	派遣者	年月日
関西地区FD連絡協議会幹事会(第5回)(京都大学)	会議出席	高橋	2011/4/27
近畿地区大学教育研究会運営委員会(京都大学)	会議出席	高橋	2011/5/14
関西地区FD連絡協議会第4回総会(京都大学)	総会出席、 ポスター発表	水島、星野	2011/5/21
大学教育学会 第33回(2011年)大会 「大学教育の質とは何か—ふたたび大学のレゾナントルを問う—」 (桜美林大学)	講演会出席	水島	2011/6/4-5
大学生研究フォーラム2011(京都大学)	講演会出席	高橋	2011/8/1
第5回大阪府立大高専 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (大阪府立大学工業高等専門学校)	ワークショップ	水島	2011/8/10-12
「SPODフォーラム2011」プログラム(愛媛大学)	講演会出席	廣島	2011/8/24-25
IDE大学協会近畿支部 IDE大学セミナー 「海外に出ない学生たち—内向き志向をどう破る—」(京都大学)	講演会出席	高根	2011/8/26
第36回教育システム情報学会 全国大会 「情報技術で拓く未来への学び—先進性と実践性の両立に向けて」 (広島市立大学)	講演	小島	2011/8/31-9/2
近畿地区大学教育研究会 第80回研究協議会(京都大学)	シンポジウム出席	高橋	2011/9/3
日本教育工学会 第27回全国大会(首都大学東京)	講演	小島	2011/9/17-19
情報処理学会 第6回CLE研究会「学習履歴データの利用」および一般 (AOSSA)	講演会出席	小島	2011/12/1-2
大学ICT推進協議会 2011年度年次大会(福岡国際会議場)	講演	小島	2011/12/7-9
学生FDサミット2012冬(追手門学院大学)	教職員と学生の交流	廣島	2012/2/25-26
九州工業大学教育フォーラム 文部科学省GPフォーラム 「大学教育におけるパラダイムシフトと新機軸」	講演(パネリスト)	星野	2012/3/7
第18回大学教育研究フォーラム(京都大学)	講演(パネリスト) 講演会出席	高橋 星野、谷口、塚本 高根、上垣	2012/3/15-16

●戦略的大学連携支援プログラム

平成21年度、文部科学省の「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」に採択され、同志社大学、北海道大学、大阪府立大学、甲南大学の4大学が連携して取り組んできた「相互評価に基づく学士課程教育質保証システムの創出—国公立4大学IRネットワーク」の補助事業としての活動期間は、今年度で終了となります。今後は、これまでの取組みの成果をより広く展開し、高等教育全体における学士課程の質保証システムを推進することを目指し、コンソーシアムを設立します。

◎「一年生調査2011年」の実施及び調査報告書の作成と「上級生調査2011年」の実施

設置形態の異なる4校に今年度から1校加わり、各大学の学生に大学生活を自己評価していただくことにより、それぞれの大学における教育の成果を測定することを目的として引き続き「一年生調査」を実施しました。今年度初めて実施した「上級生調査」は、2年前に「一年生調査」に回答していただいた学生を対象に同じ内容で調査し、一年生の時に感じたことがその後どのように変化したのかを探り、大学における教育成果を測定することを目的としています。

調査の実施期間: 一年生調査 2011年11月1日～30日、報告書の発行 2012年3月5日

上級生調査 2011年10月1日～31日

◎IR関連のシンポジウム等への学外派遣

派遣先	派遣内容	派遣者	年月日
AIR(Association for Institutional Research)のワークショップ(カナダ)	講演会・意見交換	高橋	2011/5/20-24
第1回IRワークショップ「IR人材育成のために」(同志社大学)	講演会出席	高橋、星野、 大坪、原田、 上垣、西野、 廣島	2011/8/23
2011年度大学行政管理学会 第15回定期総会・研究集会(金城大学)	講演会出席	上垣	2011/9/3-4
2011年度第2回第五分科会「大学におけるIR」(富士通関西システムラボラトリ)	講演(パネリスト)	高橋	2011/11/18
第2回IRシンポジウム(同志社大学)	講演 「IRシステム・IRツールについて」 講演会出席	高橋、大坪 辻田、星野、 柳、原田、 八木、西端、 山口、廣島	2011/12/4
国際シンポジウム「グローバル時代の大学マネジメントと質保証」(東北大学)	講演会出席	上垣、廣島	2012/1/24-25
IRコンソーシアム参加校募集説明会(同志社大学)	説明・個別相談対応	水島、大坪	2012/2/16
IRコンソーシアム参加校募集説明会(甲南大学ネットワークキャンパス東京)	説明・個別相談対応	高橋	2012/2/18
IRコンソーシアム参加についての説明会(一般社団法人公立大学協会)	説明・個別相談対応	高橋	2012/3/5
IRコンソーシアム参加についての説明会(大阪府立大学中之島サテライト)	説明・個別相談対応	高橋、大坪	2012/3/14

編集後記

今回は、長澤理事に「巻頭言」のご執筆をお願いしました。長澤先生は、本学工学研究科の教授から、大阪府立工業高等専門学校（現在の大阪府立大学工業高等専門学校）の校長になりました。校長として赴任してすぐに、ティーチング・ポートフォリオに着目されたとのこと。FD活動として重要であることに直ぐに気付かれ、自らもポートフォリオを作成されたと述べられています。「巻頭言」においては、ティーチング・ポートフォリオについて、たいへん詳しく紹介されています。本学の今後のFD活動にとっても、大きな刺激となるものです。ポートフォリオを作成している教員が、5割を超えているとのことには驚かされます。

平成23年度は、以前にもまして多くの方々に、『フォーラム』への原稿をお願いしました。大学の改組をひかえ、お忙しいにもかかわらず、ご執筆いただきましたことに御礼申し上げます。（高根）

大阪府立大学 高等教育開発センター センターニュース『FORUM』

平成24年3月30日発行

発行者 公立大学法人 大阪府立大学
高等教育推進機構 高等教育開発センター
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
<http://www.fd.las.osakafu-u.ac.jp/>
印刷所 くすの木印刷
〒586-0081 大阪府河内長野市緑ヶ丘北町25-21

〈編集委員〉 新井 隆景（センター長） 大木 理 兼田 博 小島 篤博 高根 雅啓 高橋 哲也 谷口 栄一 車 美愛 塚本 民雄
林 利治 星野 聡孝 松室 光 水鳥 能伸（副センター長） 山口 義久 廣島 はるみ・藤澤 圭子（事務担当）

この冊子は1500冊作成し、1冊あたり86円です。